

人のぬくもりとふれあいが奏でる躍動のまち 丹波高原文化の郷●京丹波

広報 | 京丹波

NO.111

2015年1月19日発行

1月号

京丹波の空に
熱気球上がる





新春ごあいさつ

京丹波町は今 光り輝く時代を迎える



今月の表紙

12月7日に行われた熱気球の搭乗体験「バルーントライアル」。町内外から訪れた子どもたちが、京丹波の空を飛行しました。



京丹波町長 寺尾 豊爾

町民の皆さま、明けましておめでとうございます。平成二十七年の輝かしい新春をお迎えになりましたこと、心からお喜び申し上げます。

町民の皆さまから二期目の町政の舵取りをお任せいただき、二年が経過しました。この間、私が目指します「安心」「活力」「愛」のあるまちづくりは、皆さまの温かい支援に支

れている友好町の福島県双葉町への支援については、物中心の交流から、人中心の交流による「絆」を二層大切にし、心の通う支援や交流を行ってまいりたいと考えております。

一方、昨年は、町民の皆さまの信頼を裏切る公金の私的流用事件が発生しました。このことは、町政を預かる者として誠に申し訳なく思っております。今年も、皆さまからの信頼を回復するため、職員の意識改革や倫理



京丹波町議会議員 野口 久之

新年明けましておめでとうございます。町民の皆さまにおかれましては、平成二十七年の輝かしい新春をご家族おそろいで迎えられましたことに、謹んでお祝い申し上げます。

新年にあたり、京丹波町議会を代表いたしまして、年頭のごあいさつを申し上げます。さて、昨年を振り返りますと、二月に冬季ソチ・オリンピックが開催され、友好町である北海道下川町出身のレジェンド・「生ける伝説」と称される葛西紀明選手がスキー・ジャンプ競技で見事、銀メダルを獲得するなど、

NO.111 CONTENTS

- 2 新春ごあいさつ
- 4 2014年を振り返る
京丹波のおもなできごと
- 5 京丹波の空に熱気球が上がる
バルーントライアル
- 6 共生社会の実現を目指して
心の輪を広げる体験作文
- 8 Dr's Message いきいき健康術
- 9 FLASH KYOTAMBA TOWN NEWS 2015
 - 自立更生へ思い新たに
—身体障害者福祉大会
 - 優しさあふれるまちへ
—人権講演会
 - 大作を寄贈
—泰友書道会が書を寄贈
 - 迎春準備整う
—須知高校生が冬のセットと門松を届ける
 - 農林業振興に功績
—農林水産フェスティバル
 - 力を合わせ作り上げる
—京都祇園八坂神社本殿のしめ縄作り
 - 悲願の優勝
—府民総体野球競技
 - 古き日本文化を学ぶ
—しめ縄作り体験会
 - 地域産材にふれる
—木育事業
 - ぬくもりある空間を演出
—まきストーブを設置

えられ、着実に進んでまいりました。本年につきましても、全ての町民の皆さまが、日々生活に幸せを感じていただける町政を進めていく決意を新たにしているところです。

さて、昨年を振り返りますと、二月に開催されたソチ・オリンピックでの羽生結弦選手、葛西紀明選手ら日本人選手の活躍をはじめ、青色発光ダイオード開発による赤崎勇氏、天野浩氏、中村修二氏のノーベル物理学賞受賞など、世界を舞台に日本人が活躍した一年でした。一方、国内では、八月に台風と前線による豪雨が毎週のように各地を襲いました。多くの犠牲者を出した広島市での土砂災害など、被害は甚大なものとなりました。災害からの復旧は今なお続き、一昨年に発生した台風十八号災害の復旧とともに、各地で作業が進められています。

このような中、本町の財政運営面においては、依然として厳しい状況にありますが、今後も安定した行財政基盤の確立を目指し、引き続き健全化対策を進めてまいります。

平成二十七年は、丹波町・瑞穂町・和知町が、一つの町として歩み始めて十周年を迎える年となります。また、京都縦貫自動車道が全線開通し、人と物の流れが大きく変わって

我々国民に夢と希望と大きな感動を与えてくれました。

そうした反面、八月豪雨による広島市の土砂災害や九月の御嶽山の噴火などで多くの尊い人命を失い、まさに、想定外の災害が発生した年でもありました。

このような中、合併十周年の記念すべき年を迎える本町におきましては、今春の京都縦貫自動車道全線開通に時を合わせ、丹波パークエリア内に地域振興拠点施設として、道の駅「京丹波 味夢の里」が着々と整備されようとしております。さらに、京都府では隣接する丹波自然運動公園を葛西選手のように、世界に羽ばたくジュニアアスリート育成の拠点施設として再整備する「京都トレニングセンター」構想も重点施策として推進いただいております。私も京都府町村議連会の京都府との懇談会の場におきまして、山田知事に対し、全国規模の大会も誘致できるように陸上競技場の二種公認化を直接要望させていただきますところ、本年から前向きに取り

本町におきましては、今春に開通予定の京都縦貫自動車道丹波綾部道路に隣接する地域振興拠点施設「京丹波 味夢の里」が京都府内で十六番目の道の駅に登録されました。この道の駅が、皆さまと町を訪れる人たちをつなぐ架け橋となることを望むところです。

また、町内では、一昨年の北海道下川町との友好交流協定締結、京丹波町森づくり計画の策定などを受け、町面積の約八三%を占める森林を資源と捉え、新たに設置した地域資源活用推進室を中心に、活用に向けた取り組みを進めているところです。京丹波町の里山の恵みを余すことなく活用し木のある暮らしを取り戻すことで、心豊かな生活を送れるよう取り組んでいきたいと考えています。

次に、今なお先の見えない避難生活を送ら

いく年でもあります。この節目となる一年を町民の皆さまと手を携え、これからのまちの発展に向けた礎が結実する一年としていきたいと考えていますので、ご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

後になりましたが、今年一年が町民の皆さまにとりまして、幸多き一年となりますよう心からお祈り申し上げます、新年のごあいさつをいたします。

組みを進める旨、うれしいご回答をいただいたところであります。

一昨年に供用を開始された畑川ダムを含め、これら全ての事業は、縦貫道の全線開通を契機として、通過される町ではなく、府内はもとより、関西圏全域から訪れたいくなる町へと結実させていくための、今やるべき未来への投資であると考えております。

しかし、合併特例期間の終了を間近に控え、本町の財政状況が益々厳しさを増していくことも事実であります。町民の皆さまにとつて真に必要な施策、サービスが、取捨選択を加えながら展開されるよう、議員一丸となつて、議決機関の機能を、より一層強化してまいり所存でありますので、今後におきまして、皆さま方おひとりのご理解とご支援をよろしくお願ひ申し上げます。

2014年を振り返る

京丹波の主なできごと

京丹波の大空に熱気球が上がる

バルーントライアル



丹波自然運動公園で十二月七日、「京丹波バルーントライアル」として、熱気球の体験搭乗会が行われました。この体験搭乗会は、町内の子どもたちなどに気球を体験してもらうことを目的に、一般社団法人Future design Labが開催。早朝から多くの人たちが訪れ、京丹波の空に初めて上がった熱気球の搭乗を体験しました。

会場では、子どもたちが乗り込んだ熱気球は、バーナーの熱で少しずつ上昇。乗り込んだ子どもたちは、約三十メートル上空まで上がった熱気球から見下ろし、保護者などに手を振っていました。

また、世界でも一つしかない地球をデザインした熱気球「ワンダーグロウブ号」も披露され、子どもたちは、大きく膨らんだ熱気球を珍しそうに見上げていました。

体験搭乗会後には、須知高校体育館に会場を移し、熱気球教室も開催。子どもたちは、館内で広げられた気球の中に入り、大きさを実感していました。

熱気球に搭乗した細見美紀さん(豊田)は「上がりはじめてときはふわっと浮いた感じでした。初めて気球に乗ったけど、すごく高かったです」と、気球に乗った感想を話していました。



上空から手を振る参加者



気球から望むまちなみ



気球を広げる参加者



成人式



「京丹波 味夢の里」が道の駅に登録



須知高校がインターハイホッケー競技でベスト8



原子力災害住民避難訓練

- 1月
 - 町消防出初式開催(12日)
 - 新成人172人を祝う成人式開催(12日)
- 2月
 - 「着地型観光」をテーマに観光シンポジウム開催(27日)
- 3月
 - 中区、角区、広瀬区を対象に原子力災害住民避難訓練を実施(16日)
 - 丹波PAと一体的な地域振興拠点施設の名称を「京丹波 味夢の里」に決定
- 4月
 - 本町の教育の基本指針となる京丹波町教育振興基本計画を策定(4日)
- 5月
 - 大丹波連携推進協議会構成市町が、災害時相互応援に関する協定を締結(8日)
- 6月
 - 町内初の地域活動支援センター「さんぼ」が開所(1日)
 - わちグラウンドで町消防操法大会開催(1日)
 - 町内で降ひょうによる被害が多発(12日)
 - 町長と語るつどいを町内22会場で開催(6月24日～9月2日)
- 7月
 - 旧高原小跡地に、丹波高原荘が移転・竣工(23日)
- 8月
 - 府消防操法大会において、町消防団丹波支団が小型ポンプ操法の部で第3位入賞(1日)
 - 町社会福祉協議会と「災害時におけるボランティア活動等に関する協定」を締結(28日)
 - 京丹波花火大会(5日)、わちふるさと祭り(25日)が開催。
 - 南関東総体(インターハイ)において須知高校男子ホッケー部がベスト8進出
- 9月
 - 閉校後の小学校の活用について考える「想い出学舎活用シンポジウム」開催(27日)
- 10月
 - 29年の歳月をかけ丹波広域基幹林道が開通(11日)
 - 丹波自然運動公園などを会場に「京丹波 食の祭典2014」が開催(26日)
- 11月
 - 京都丹波ロードレース開催(3日)
 - 市場区、大倉区を対象に原子力災害住民避難訓練実施(24日)
 - 木質バイオマスエネルギー活用推進委員会設置(25日)
- 12月
 - 丹波自然運動公園で熱気球の搭乗体験「京丹波バルーントライアル」開催(7日)

心の輪を広げる体験作文

十二月三日から九日までの障害者週間の啓発を目的として、京都府が、「出会い、ふれあい、心の輪——障害のある人となし人との心のふれあい体験を広げよう」をテーマに行われた体験作文コンクール。今年度、同コンクールで最優秀賞を受賞した大東啓子さん（本庄）の作文が、各都道府県から推薦された作品の中で内閣府最優秀作品（内閣総理大臣賞）を受賞しました。

障害のある人となし人が、区別されることなく、社会生活を共にするのが正常なことであるとすると「ノーマライゼーション」の考え方の普及のため、大東さんの作文と感想をお伝えします。

生まれて初めての女子会

大東 啓子

母は体調が悪いのに私を命がけで産んでくれた。結果、私は歩けない、話せない、手も思うように動かないという、体に重い障害を負うことになってしまった。

母は自分を責め、嘆き悲しみ、何度となく母子心中を考えたといい。でも、どちらかが残った場合のことを思うと、決断が出来なかった。その頃の母はすごく暗い表情をしていた。それを見て、三才か四才だった幼心にも「母に殺される」という恐怖感を感じたのである。

ある日、私が絵にならない絵を描いて、母に見

せたそうだ。それは汽車らしき絵で、それを見た母は「あつ、この子は母親の思いを全て感じてる」と気付いて、すごくシヨックを受けたと大人になってから話してくれた。

あらゆる病院を受診したが「こんなお子さんは五才まで生きられません」と宣告された私を母は必死で育ててくれた。

母と私は、母と娘であり、親友だったのだ。

私が物心ついた頃から「お父ちゃんがお金を入ってくれんで、うちはお金がないんやで」などなど色々母は私に言っていた。きつと母は、私の記憶には残らないだろうと思ったのだから。

兄の父は戦死。だから兄は父親の顔を知らない。その後、母は兄の父の弟と再婚したのである。

戦後六十九年が過ぎた現在では、考えられな

いことだが、当時は当たり前前の結婚だったと母から聞いた。そんな状態の中で、母はだれにも言えない苦しさ悲しさなどを、私に言うしかなかったのだから。

そして大人になってからは本当に何でも言い合える母娘になっていったのである。

そのかけがえない母が、昨年一月に、九十二歳で逝ってしまった。

私と六十年間付き合ってくれた母。

言語障害の重い私は、母にしか通じない言葉も多かった。そんな状態の中で、漫才のような会話をする日々だった。例えば、私が五才までも生きられない不治の病と宣告された時のことを、

「私はあんと死のうと何度も思ったんやで」と母が言うので、

「おかあちゃんと私は死神さんに見放されたんやから生きるしかないなあ」と私は言った。

またある時は、

「あんだ、私より先に死にないな」と母が言うので、私はすかさず、

「あんだ、私の親やろ？それは、ちよつと無理やで」と言つて、大笑いしたこともあった。

そして、亡くなる数日前に夫が一人で病院に見舞つと、

「啓子を抱いて逝きたいので、連れて来て」と、はっきりとした意識と言葉で言ったと言う。きつと母は、あの世に行つても私と漫才がしたかったのだから。そして、母は逝つてしまった。

私の悲しみは想像をはるかに超えるもので、葬儀が終わると、寝込んでしまったが、その時は多くの励ましもあつて「これではいけない。頑張らなければ」と思つて立ち直れた。ところが母を失った本当の悲しみは一年後に私を襲つた。

お正月が明け、一周忌も済んだ直後から、全身の力が抜けたようになつた。手足に力が入らず、トイレへ行く度にこけたり、部屋で車椅子から落ちたり、食欲もなくなつた。

何かからだが生きていることを拒否しているような感じで、自分でもどうすることも出来なかつた。そんな状態が春頃まで続いたが、暖かさと共にだんだん気力も戻つてきた。

「よし、頑張ろう」と思つた間もなく、私が必死で打ち込んだデーターの入ったパソコンがこわれた。私は左手の中指一本でパソコンのキーを打つ。命中率は十回のうち二〜三回。

「また最初からか」と思うと、底無し沼落ち込んだ……。

次は歯痛に襲われ、抜歯。ところが部分義歯を支えていた歯だったため、義歯が入らなくなった。地元の歯科の先生も頑張つて下さり、私も頑張つたが、入れられないままだ。すごく恥ずかしくて、どこにも行きたくない。そんなことで私は「ひきこもり状態」になってしまった。

そんな或る日のこと、別の用事で福祉課の女性の方が訪問して下さり、いろいろと話をきいてもらつて、

「そんなに元気がないのなら、私が計画をしますから、楽しい女子会をしましょう」という話になつた。「女子会って何？」と思つているうちに、その日がやつて来た。

会場は家から少し離れたスーパーの和食店。メンバーは福祉課の女性と、いつもお世話になつているヘルパーさん。女性ばかり。

「だから女子会なのか」と思った。私の送迎役の夫は隣のパチンコ屋さんと大好きなパチンコ。

私たちは、美味しいお料理を食べて、ビールを飲んで、思い思いに言いたいことを言った。

私は、「世の中にこんなにも楽しいことがあるのか」と思った。

悲しいこと。辛いこと。体の痛みさえ忘れてしまつた時間であつた。

「よし、頑張ろう」と思った。

「また、やろうね」と約束して、解散。

帰りの車で母のことを思つた。

男尊女卑の時代に生きた母も、こんな楽しい時間があつたらなら……。

保健課の女性、ヘルパーさんには、本当に感謝

ありがとうございました。

大東 啓子さんの感想

今回の受賞を十一月の初めごろに聞いたとき、大変なことになったと思ひました。それは、平成三年にも内閣総理大臣賞をいただいたのですが、そのときが大変だったからです。東京での授賞式は、とても緊張しました。

最近、首が痛かったり腕が動かなくなつたりしてはがゆい思いもあります。日々つづつている文章をまとめて3冊めの出版に向けてがんばりたいと思います。



表彰状を受け取る大東さん(中央合同庁舎8号館・東京都千代田区)

※作文は受賞作のため、原文のまま掲載しています。

いきいき健康術 第89回

「その飲み方、大丈夫？
～忍び寄るアルコール依存症～」

このコーナーは、町立病院・診療所の医師や専門職員が皆さんにお届けする健康情報コーナーです。
今回の担当は、国保京丹波町病院の内科医師横井大祐先生。度が過ぎると依存症などの症状を引き起こすお酒（アルコール）に関するお話です。

忘年会、新年会とお酒の席が増える冬の時期ですが、皆さまはどのようなお酒で過ごでしょうか。飲んで楽しく過ごすためのお酒ですが、大きな危険があるのです。

お酒（アルコール）は依存性の強い物質で、精神依存、身体依存のどちらも存在します。多くの量を飲み続けると、体も心も、あなたの全てが酒に支配されてしまいます。具体的には、隠れて酒を飲んだり、酒のために借金をしたり暴力を振るったりします。また、アルコールが抜けてくると、吐き気や嘔吐、動悸や発汗、寝汗や不眠、震え、幻覚といった離脱症状が起こり、酒を求め続けます。

多くの方は、自分がそうなっていることに気づいていません。日本に依存症の人は八十万（疑いは四百四十万人）もいるといわれています。そのうち治療を受けている人はごく一部です。治療は一生酒をやめ続けるしかなく、ちよつと二杯のつもりで飲んでも、たちまち再びお酒に支配されてしまいます。入院して断酒プログラムを受けたり、断酒会に入っ努力を続けたりする方法があります。依存症にならないようにするのが重要で、次のような飲み方をしている人は要注意です。

- たくさん量を飲んでいる
（特に日本酒五合、ビール二千ミリリットル以上）
- やめようと思ったのに飲んでしまう
- 周囲の人に注意されても飲んでしまう
- 朝から飲んでいる



内科医師 横井 大祐 先生(京丹波町病院)

女性や未成年は、さらに依存症になりやすく、少量短期間で依存症に陥ってしまいます。未成年、飲めない人への飲酒の強要は絶対にだめです。女性は少量でたしなみましよう。
医学的にいわれている適正な飲酒量は、アルコール十〜二十グラム（ビール三百ミリリットル、日本酒百五十ミリリットル程度、女性はその三分の一）です。また、最低一週間に一回は、休肝日を設けましよう。

お知らせ
京丹波町病院では、平成二十六年四月から土曜日の内科・小児科の午前診療を、毎週行っています。
☎ 86-0220

自立更生へ思い新たに

■身体障害者福祉大会

京丹波町身体障害者福祉会（谷静夫会長）が、十二月三日、町中央公民館で身体障害者福祉大会を開催しました。

大会では、障害者の社会参加と自立を目指した大会決議のほか、自立更生者と援護功労者の表彰、会員による体験発表などが行われました。

同会会員の北村歩さん（実勢）が

行った体験発表では、生まれつきの障害により何度も手術を行ってきたことや、職業訓練校でパソコンの使い方を習ったことが今の生きがいになっていることなどを発表しました。

また、旅行などへ行つたとき、段差にスロープがない場所では、みんなに助けてもらっていることなどを話し「世話をかけたくないけど、世話にならないといけないことはあります。『ありがとう』と、日ごろから心がけていることを話していました。



体験発表する北村さん(町中央公民館・蒲生)

大作を寄贈

■泰友書道会が書を寄贈

町はこのほど、町内で五つの教室を開く泰友書道会の竹嶋泰華会長から、書の寄贈を受けました。

この書は、同会が毎年行っている書を通じた交流の一環として、平成二十五年十月二十八日から十一月三日まで、本町の姉妹都市オーストラリアホークスベリー市を訪問し、現地の人たちとの交流の中で書かれたものです。

書には、訪問した同会役員の書をはじめ、ホークスベリー市の人たちに「Hope」や「Smile」などの文字も書かれており、十一月に開催された文化祭などで展示されました。

寄贈した竹嶋会長は「作品は多くの人に見てもらったほうがよいと思つています」と、寄贈した経緯を話していました。

優しさあふれるまちへ

■人権講演会

京丹波町人権講演会が十二月六日、和知ふれあいセンターで開かれました。教育サポーターの仲島正教さんが、人と人とのふれあいを通じた人権教育について講演しました。

この講演会は、十二月四日から十日までの人権週間に合わせて、人権思想の普及啓発を目指して町と町教育委員会、町人権啓発推進協議会が毎年開催しているものです。仲島さんは、教師として子ども

たちに向き合つたときの話を例に上げ「子どもたちはきつい言葉には、きつい言葉で返すもの。自分のことを見てほしいとサインを出しているの、そのサインに気づける人になってほしい」と、参加者に訴えました。



人のつながりを通じた人権教育について話す仲島さん(和知ふれあいセンター・本庄)

くと思ひます」と、人権問題解決に向けた自身の考えを話していました。



寄贈された書について話す竹嶋会長(右)と寺尾町長(役場町長室・蒲生)

迎春準備整う

■須知高校生が冬のセットと門松を届ける

須知高校食品科学科の生徒が十二月二十二日、京丹波町役場を訪れ、制作した門松を設置するとともに寺尾豊爾町長へ同科食品加工コースの生徒が制作したソーセージや黒豆ビスコッティーなどを詰めた「冬のセット」を届けました。

設置された門松は、同学科公園管理コースの生徒が、校内で栽培したハボタンをはじめ、マツやウメなどを使って制作したもの。町役場のほか、丹波自然運動公園など四カ所に設置しました。

制作に携わった同校二年の山内喬介さんは「二つで二対なので、左右のバランスをとるのが難しかったです。この門松を見て新年を実感してほしい」と、自分たち



設置された門松の前で冬のセットを受け取る寺尾町長(京丹波町役場・蒲生)

農 林業振興に功績

■農林水産フェスティバル

京都府内で生産される農林水産物が一堂に会し、生産者と消費者のつながりを深めるイベント「京都府農林水産フェスティバル二〇一四」が十一月二十九日と三十日、京都府総合見本市会館で開催されました。

十一月二十九日に行われた表彰式では、日ごろから京都府内の農林水産業の振興に尽力され、功労のあった人の表彰と京丹波く

農林水産業功労者表彰

- ▼農林水産業者
片山加代子(大鷹)
- ▼技術改良・伝承・研究者
徳島 弘(新水戸)

京都府丹波くりに品評会表彰

- 〈全体賞〉
▼京都府特用林産振興連絡会長賞
白樫 貢(下乙見)
- ▼京都府農業協同組合中央会長賞
山内善継(市場)

〈地域賞〉

- ▼京丹波町長賞
越川克己(市場)



受賞された片山さん(写真前列一番右)と徳島さん(同左から2番目)(京都府総合見本市会館・京都市)

▼京都農業協同組合理事長賞 野間貞子(坂原)

悲 願の優勝

■府民総体野球競技

京都府内二十四の市町村が参加する第三十七回京都市府民総体体育大会野球競技において、京丹波町チームが優勝を飾りました。

十一月三十日に行われた準決勝では、亀岡市と対戦。投手戦となったこの試合は、両チームとも一点ずつを取り合い、引き分けました。大会規定により抽選で勝ち上がった京丹波町チームは、同日に城陽市

と決勝戦を戦い、見事七対一で勝利を収めました。

優勝を決める一戦で決勝タイムリーを放った山内浩二朗さん(質美)は「二年前は決勝戦でサヨナラ負けを喫し、とても悔しい思いをしました。今大会は、チャンスで打つことができ、優勝に貢献できたことがうれしいです」と、自身も貢献したチームの優勝を喜んでいました。



優勝した京丹波町チームの皆さん(京都府山城総合運動公園野球場・宇治市)

古 き日本文化を学ぶ

■しめ縄作り体験会

しめ縄作り体験会が十二月二十一日、松山公民館で行われました。約九十人の参加者が、自宅の玄関先などに飾るしめ縄作り挑戦しました。

この体験会は、町ふるさと体験資料館運営委員会(北村始子委員長)と町教育委員会が開催しているものです。

参加者は、同委員会の委員や講師として参加した人たちから、縄

のない方などを教えてもらいながら、しめ縄を作りました。

昨年に続いて参加したという片山数馬さん(曾根)は「自分で作ったしめ縄でお正月を迎えようと参加しました。基本の縄ないが難しいです」と話しながら、自宅に飾るしめ縄を作り上げていました。



しめ縄を作る参加者(松山公民館・大朴)

力を合わせ作り上げる

■京都祇園八坂神社本殿のしめ縄作り

下山地内の尾長野区で十二月二十一日、地区住民による京都祇園八坂神社に奉納するしめ縄作りが行われました。

この取り組みは、同神社の分社と神饌田がある尾長野区で毎年行われているものです。

住民らは、五月二十五日に神饌田で実施した田植え神事「御田祭」で植えた稲を九月末に収穫。そのわらを使い、数人がかりで直径約七十センチ、長さ三・五メートルもある大しめ縄三本などを作り上げました。

半日かけて作られたしめ縄は、十二月二十三日、祇園の八坂神社へ奉納されました。



大しめ縄を作る住民(下山)

人の動き

(敬称略)

- 教育委員(任期四年)
教育委員長／大西弘二(質美)
同職務代理者／
櫻井博規(三ノ宮)
- 【新任】竹吉美公(下山)
- 【退任】奥田健次(実勢)
- 固定資産評価審査委員(任期三年)
【新任】岡花芳樹(質志)
- 【退任】大西晴乘(質美)
- 人権擁護委員(任期三年)
【再任】谷 碩子(質美)
- 和久田正八(長瀬)

義援金などの受付状況

東日本大震災への支援として取り組んでいる「義援金」と、友好町・福島県双葉町への「復興支援募金」の受付状況をお知らせします。

受付金額	
義援金	9,268,218円
復興支援募金	6,273,008円

*平成26年12月31日現在

わたしたちの町

人口	15,554(-25)
男	7,354(-12)
女	8,200(-13)
世帯数	6,405(±0)
1月1日現在 / ()は前月比	

地域産材にふれる

■木育事業

わち山野草の森で十二月十三日、木育事業を開催しました。参加した子どもたちは、保護者とともに、町内で間伐されたヒノキを使ってクリスマスツリー作りを行いました。

この事業は、幼児期から地域の木材との関わりを深めることで、森林に対する理解を深めることを目的に今年度から実施しているものです。

参加者らは、京丹波森林組合が行った間伐で出たヒノキなどを使い、府立林業大学の木村祐一副校

長や、わち山野草の森の山田義法園長らの指導を受けながら、ツリーを立てる箱づくりなどを行いました。

クリスマスツリーを作るのにネジしめやのこぎりでヒノキの枝を切った杉本辞君(鎌谷中)は「ネジをしめるのは硬かった。(木を切るのは)すぐく力が必要で、少し手が痛かった」と話していました。

今回、作成したツリーは、町内の保育所や幼稚園、小学校などに配られ、それぞれで飾り付けられました。



ツリーを立てる箱を作る参加者(わち山野草の森・坂原)

ぬ くもりある空間を演出

■まきストーブを設置

本町ではこのほど、京都・丹波食彩の工房とグリーンランドみずほ内の森林浴レストランにまきストーブを設置しました。これは、本町の約八三%を占める森林の有効活用を目指し、昨年度から公共施設への設置を進めているものです。

京都・丹波食彩の工房では、十二月四日に竹野活性化委員会(中西

和之代表)が開設する「竹野サロン」が開催され、施設内が設置されたストーブの熱で暖められました。

サロンを訪れた野田義巳さん(高岡)はストーブの中で燃え上がる火を見ながら「昔を思い出します。(ストーブの火は)やわらかく暖かいですね。情緒を感じます」と、訪れた人たちとストーブにあたりながら話していました。



まきストーブが設置された室内で話が弾むサロン(京都丹波食彩の工房、高岡)

京丹波町のシンボル

【町の鳥】
うぐいす【町の木】
イチヨウ【町の花】
つつじ

編集後記

あけましておめでとうございます。輝かしい新年の幕開けを、皆さんはどのように過ごされたでしょうか。

年末年始は、この時期では近年にない大雪が降りました。編集部も連日の雪かきでしたが、日ごろの運動不足が少しでも解消できたかなと思っています。

今年は平成17年10月11日の京丹波町誕生から10年の節目を迎える年となります。この1年が、町民の皆さんや京丹波町にとって、よい年となることを願っています。(T)